

河上肇全集

続
4

岩波書店刊行

河上肇全集 続4

第六回配本(第Ⅱ期全八卷)

一九八五年一〇月二日 発行

定価 四七〇〇円

著者 河上肇

発行者 緑川亨

発行所 株式会社 岩波書店

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五-1
電話 〇三-2611
振替 東京六三三〇〇

印刷・三陽社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

凡 例

一 本巻に収録したものは次のとおりである（詳しくは「解題」を参照）。

- (1) 『社会問題研究』に一九回にわたって連載された「資本論略解」
 - (2) その続編にあたる単行本『マルクス資本論略解 第一巻第三分冊』の序、目次、および本書の著者自製広告文
 - (3) 京都帝国大学夏期講習会のために作成されたノート「資本論大意」
- 二 底本を忠実に翻刻することを旨としたが、読解の便をはかり、次の方針で整理した。

- (1) 常用漢字を用い、異体字等については通行の字体に改めた。
- (2) 仮名遣い、平仮名・片仮名の別は底本通りとした。
- (3) 清音と濁音は現行の表記法に従って整理した。
- (4) 明らかな誤字・誤植は正し、脱字は「」で補った。
- (5) 一般慣用と異なる用字・用語や仮名遣いの誤りなどは、著しく理解を妨げる場合を除き、底本のままとし、とくに注記を施さなかった。

例 緩漫(慢)、太(大)切、ゆへ(愈)

また文意の通じにくい箇所には、適宜「」で傍注を施した。

- (6) 底本にある引用符は慣用に従って整理した（引用文や論文名などは「」、書名・雑誌名などは『』）。
- (7) 河上による注記を示す括弧は「」に統一した。
- (8) 「マルクス資本論略解」は長期にわたった連載のため、形式等に不統一がみられる。注については頁ごとの脚

注をまとめて節の終りにおこなうなど若干の整理をおこなったが、本文は原則としてそのままとした。

目次

凡例

マルクス資本論略解……………一

マルクス資本論略解 第一卷第三分冊……………三七

別篇

資本論大意……………三三

解題……………杉原四郎……………四九

マルクス資本論略解

『社会問題研究』45冊（大正12年5月30日）～72冊（大正15年6月20日）

目次

(その一)……………	『社会問題研究』45冊……………	九
研究の対象としての資本的剰余価値……………	……………	一〇
標題の又書「経済学の批判」の意味……………	……………	一五
全三巻の構造……………	……………	一七
(その二)……………	『社会問題研究』46冊……………	二五
資本の生産行程Ⅱ資本的剰余価値の成立……………	……………	二五
商品及び商品の価値(労働価値説)……………	……………	二六
価値と使用価値……………	……………	三〇
価値と交換価値……………	……………	三二
資本的剰余価値……………	……………	三七
貨幣の資本への転化……………	……………	三九
(その三)……………	『社会問題研究』47冊……………	四六
労働力の商品化……………	……………	四八
(その四)……………	『社会問題研究』48冊……………	五三
労働行程(即ち使用価値——物質的富——の生産行程)の一般的性質……………	……………	五五
資本家的生産の下における労働行程……………	……………	五七

価値形成(増殖)行程としての労働行程	五九
労働の二重性と価値の移転および創造	六三
不変資本および可変資本	六六
(その五)	七〇
『社会問題研究』49冊	七三
剰余価値率	七三
労働力の絞り取りの程度	七六
絶対的剰余価値の生産(労働時間の延長)	八二
相対的剰余価値の生産(その一、労働生産力の増加)	八六
相対的剰余価値の生産(その二、労働能率の増進——その三、労賃の引下げ)	九三
(その六)	九六
『社会問題研究』50冊	九六
利潤率	九六
資本の構成	九六
資本の構成は次第に高級に進む	一〇一
利潤率下落の法則	一〇五
資本家的生産の必然的行き詰り	一〇六
貨幣資本の転形および循環	一一〇
貨幣資本転形の第一段	一一三
貨幣資本転形の第二段	一二五
貨幣資本転形の第三段	一二七

(その七).....	『社会問題研究』51冊.....	二九
産業資本は資本の唯一の種類ではない.....		二九
産業資本は生産と流通とを統一する.....		二九
資本の流通は一般的商品流通と連れ合ふ.....		二七
個別的資本の流通は互に繋がり合ふ.....		二〇
商品資本の循環.....		一三
(その八).....	『社会問題研究』52冊.....	三九
生産資本の循環.....		三九
単純複生産と生産資本.....		一四
拡張複生産と生産資本.....		一四
資本の回転.....		四七
固定資本と流動資本との区別.....		一五
固定資本と流動資本との回転の差異.....		一五
(その九).....	『社会問題研究』53冊.....	五六
作業期間と資本の回転.....		五六
生産時間と資本の回転.....		六〇
流通時間と資本の回転.....		六二
回転時間(特に流通時間)が放資額に及ぼす影響.....		六六

(その十).....	『社会問題研究』 54冊	一七三
可変資本の回転と剰余価値の年率.....		一七三
前数項の回顧.....		一七九
社会総資本の複生産.....		一八二
社会的生産の二部門.....		一八六
単純複生産の表式.....		一九一
(その十一).....	『社会問題研究』 55冊	一九七
複生産の技術的条件と社会的条件.....		一九七
複生産に伴ふ貨幣の流通(その一).....		一九九
(その十二).....	『社会問題研究』 56冊	二〇四
複生産に伴ふ貨幣の流通(その二).....		二〇四
複生産に伴ふ貨幣の流通(その三).....		二一〇
流通貨幣の資本家階級への復帰.....		二二二
拡張複生産の表式.....		二二九
(その十三).....	『社会問題研究』 58冊	二三六
剰余価値の分配.....		二三九
費用価格——剰余価値の利潤への転化.....		二三四
(その十四).....	『社会問題研究』 60冊	二四二
剰余価値率の利潤率への転化.....		二四二

剰余価値の利潤化に伴うて生ずる錯覚的意識	二四四
資本構成の差異に伴うて生ずべき利潤率の差異	二四六
一般的利潤率または平均利潤率の成立	二五二
商品価値の生産価格への転化	二五六
単なる商品は価値において売買さる	二六〇
(その十五)	
商品がその価値において売られるための条件	二六五
種々なる個別的価値の市場価値への平均化	二七〇
市場価値の市場価格への転化——需要供給の法則	二七五
資本家的生産の下における需要供給の特殊なる関係	二七九
(その十六)	
利潤率の傾向的下降の法則	二八九
利潤率の下落に伴ふ利潤総量の増加	二九六
(その十七)	
剰余価値の分裂形態	三〇六
商品取引資本の運動形態	三〇八
商品取引資本(として新たに出資された貨幣資本)の機能	三二六
商業利潤の泉源	三三二
『社会問題研究』 66冊	三〇六
『社会問題研究』 65冊	二八六
『社会問題研究』 61冊	二六五

(その十八).....	『社会問題研究』67冊.....	三二七
商業利潤と産業利潤との関係.....		三二七
商業資本のエレメント——商業上の賃労働者.....		三三四
(その十九).....	『社会問題研究』72冊.....	三四三
貨幣取扱資本.....		三四三
商人資本に関する史的事実——その一、資本家的生産以前の商業.....		三四九
商人資本に関する史的事実——その二、生産から独立せる商業.....		三五五
商人資本に関する史的事実——その三、古代商業と価値法則.....		三五七
商人資本に関する史的事実——その四、商業と生産方法.....		三六〇

(その1)

甚だ大胆な企ではあるが、私は本月以下何箇月かに亘り、マルクスの大著『資本』につき、極めて大体の解説を試みやうと思ふ。この書は、読者の知らるゝ如く、なか／＼大部のもので、全体が三巻から成つて居り、そのうち第一巻だけでも、之を高島氏の日本語について言へば、約六百頁づゝの三冊の本から成つて居る。その中に盛られてある議論を、僅かな頁の間に簡単に纏めると云ふことは、何人にとつても極めて困難な仕事であるに相違ない。加ふるに、彼れの議論は決して平明でなく、殊に其の一部分の理解は何時でも全体の理解を前提とするといふ点において、それは少しづゝ片付けて行ける本でなく、段々表皮をむいて漸次に核心に向ふべき性質の著作である。従て其の解説は、一層困難な仕事になる。私は今、斯様な困難な仕事を、自信を以て遂行し得るといふのでは無い。ただ私は、ものを書くことによつて、常に利益を得てゐる。平生漠然と頭の裡に描いてゐるところを、紙の上に現さうとすることによつて、自分の考を新たに整理づけ得るのみならず、之を整理づけることによつて新たに其の欠陥を見出し、筆を執りつゝ再び考を練り、之によつて新たな考に思ひ到ることが在る。だから私にとつては、ものを書くことは、既に頭の中に存在してゐる思想を単に摸写すると云ふだけではなくて、自分のために生産的の仕事となるのである。加ふるに、既に書き上げたものを世間に発表すると、いろ／＼な批評を聴く利益がある。勿論私は極めて負け嫌ひの質だから、平生注意はしてゐる積りでも、折角の利益ある批評をはね返へして仕まつて、研究者の本分に戻るやうなことも屢々あるであらう。しかし仮ひ其の批評を直ちに受け入れるだけの雅量はなくとも、それが直接間接に刺戟となつて、自ら自説を批評するの機縁となる場合は、少からず在るやうに思ふ。私は今、さういふ利益を得やうと思つて、この解説を始めるのである。たとひ私の癖として、時に自信あるものゝ如き言葉の使ひ方をしてゐやうとも、それはただ、

私は斯う考へるが読者は何う考へられるか、と云ふほどの意味を含むものと解釈して貰ひたいのである。私は読者と共に研究せんがために、先づ私の考を述べて見る、といふほどの氣持を有つてゐるに過ぎない。何時もさうである積りだが、此の場合特にさうだといふことを予め断つて置く。

研究の対象としての資本的剰余価値

マルクスが其の大著『資本』(Das Kapital)において研究したところのものは、資本的剰余価値(資本に生ずる剰余価値、資本の即ち資本家の所得となる剰余価値)である、と言つて差支あるまい。

第一に、彼れの研究の主題としたものは、剰余価値(der Mehrwert)である。それは『資本』の続巻と看做すべき彼れの学史的研究所を纂めたものが、『剰余価値についての諸学説』(Theorien über den Mehrwert)と題してあるのみならず、此の書の冒頭には、

「近代経済学の建設者は、最も天才的な且つ最もオリヂナルな経済学者の一人たる、サア・キリアム・ペティーである。

彼れの Treatise on Taxes and Contribution, London 1662. の中には、剰余価値の起源及び評価を展開したところの、数多くの個所がある。……」

と述べてあるのを見ても、彼が経済学の研究対象として、剰余価値なるものに最も重きを置いてゐたと云ふことが分かる。

しかし彼れの研究したところのものは、剰余価値一般ではなかつた。といふ訳は、元來、彼れの研究法の特色は、社会的、歴史的といふ点にあつたからである。彼れの遺稿の中に発見され、一九〇三年の三月始めてカウツキーによつて『ノイエ・ツァイト』に公表された「経済学批判序説」⁽¹⁾を見ると、彼は次の如く述べて居る。

「吾々の研究題目は物質的生産である。だから社会において生産するところの個人、——即ち社会的に決定された個人の生産が、おのづから其の出発点となる。……」⁽²⁾

「人間は最も文字通りの意味において *zoon politikon* (政治的動物) である、啻に社会的動物であるばかりでなく、また、社会においてのみ個性化し得るところの動物である。社会の外部における孤立せる個人の生産といふことは、……共同して生活し且つ共同して互に話し合ふところの個人なくして言語の発達があると考へると、同じやうな無稽なことである」⁽³⁾。

さうして既に之を社会的に観察する以上、それはまた歴史的に観察されねばならぬ。

「だから生産といふ時は、それは何時でも一定の社会的発展階段における生産……のことである。従てまた、ともかく生産について何か云ふためには、吾々は其の種々なる階段の歴史的発展過程を尋ねるか、さうでなければ、吾々の仕事は、一定の歴史的時代について、例へば近代の資本家的生産——本書における本来の題目は実に其れである——についてである」と云ふことを、最初に断つて掛らなければなるまいと思はれる。勿論総ての時代の生産は、共通な一定の特徴、共通な職分をもつてゐる。生産一般 (*die Produktion im allgemeinen*) と云ふことは一つの抽象であるが、しかし其れが共通なものを真実に摘出し、確定し、かくて吾々をして重複を避けしむる限り、それは合理的な抽象である。尤も此の一般的名もの又は比較によつて識別された共通の名ものは、それ自身がまた種々な構成成分から成り立つてゐて、其等はそれ／＼異つた規定に分れる。其等の規定の或るものは総ての時代に属し、他のものは若干のものにだけ共通である。そのうちの多くのものは、最近の時代並びに最古の時代にとつて、共通であるだらう。其等のものなくしては、何等の生産も考へ得られないであらう、しかし、たとひ最も発達した言語が最も幼稚な言語と共通な法則及び規定を有して居るにしても、その発展を決定するものは、この一般的及び共通の名ものからの差別である。生産一般に当嵌まる条件は、本質的の差異が、均一性——それは「如